

花歌はうたう

家族のかたち

岩手県盛岡第一高等学校

一年

高橋

蘭

私は、九年間も失踪していた家族が突然帰ってきた時、何事もなかったように「おかえり」と受け入れられるだろうか。この本を読み終えた時、登場する全ての人物がそれぞれを想い合う気持ちの強さに大きく心を動かされた。同時に家族のあり方について深く考えさせられた。

主人公の父ハルオは、有名なミュージシャンだったが、突然、家族を放り、どこかへ行方をくらませってしまった。しかし、九年が経った今では、家族の会話の中で普通に登場してくる。それどころか、家族は皆、別に恨んでもいいし、困ってもいいしと素気無く振る舞う。

しかし、九年が経過するまでに、妻、娘、祖母それぞれに大きな葛藤があったことは、容易に想像できる。その葛藤が、九年を経た

も自然に家族として受け入れる覚悟を持つこと
とにっばがり、父から受け継いだ歌声で家族
を取り戻すことにつばがった。さらに、その
根底でこの家族を支えているのは、家族がみ
んばが一緒にいた頃の思い出、お互いを深く
認め合う愛が存在していたことだと、私は思
う。

最近、全国ニュースでは、頻繁に虐待に関
するニュースが取り沙汰され、岩手県内でも、
子供を虐待して死なせるという衝撃的なニユ



ースが流れた。この様なニュースに接する度
に、虐待された子供のことを思うとかゆいそ
うで胸が締めつけられる。虐待する親は許せ
ないし、親としての責任もなかり得ないと思
うが、いつから歯車が狂ってしまったのだ
らうかとも考える。最初から虐待という不幸
な出来事では始まっていないのが全てのケースで
はなく、歯車がうまく回っていた家族もあっ
たのではないか。

この本では、様々な家族の形が描かれてい

る。父が失踪した家族、両親が育児放棄した家族、シングルマザーとして子供を育てた家族。子供をしっかき育てた家族に共通しているのは、子供を何かあるうと守り続けること。という覚悟を持っていくことである。シングルマザーの母は、あたしは、あたししかあんなに与えられないものがない。その代わりに、あたしの人生は全部あなたのためにある。と娘に伝えていく。すばての親がそうであるべきだとは思われないし、親にも自分の人生が

あつて然るべきだが、子供を心から愛し、何があつても守り続けるという覚悟を持っていく。虐待などという悲劇は起こらないだろう。そして、そのようには家庭で育てた子供は虐待するようには大人にはならないと思う。

今、世の中には様々な家族の形がある。家族の形態は多様である。でも、親が子を思う気持ち、夫婦がお互いを思う気持ち、家族のあり方を決めていくのではないか。

ハルオは、娘である花歌を愛し、妻である

花子は何度も心をかき乱されながらも、ハル
才を信じ、愛し続けた。花歌はさみしさを心
の奥底にしまいながらも、自分ができること
である歌で父を、家族を取り戻そうとしてい
る。そして、花歌の祖母うたは、ハル才をろ
くでなしと言いつつ、その才能や家族に対
する愛を認め、家族を温かく見守っている。
この家族は、お互いを信じ、愛している。だ
からこそ、九年間の空白で家族が壊れること
もなく、幸せを取り戻すことができたし、そ
の過程で、友達や隣人が無条件に力を貸して
くれた。

私が生きていく上で、家族は基礎である。
朝起きるとそこに家族がいて、朝食を一緒に
食べたり、何気無い会話をする。休みの日に
は、買い物や食事、時には旅行にも行く。家
族で新しい土地に引っ越したこともある。日
々の楽しいことも、苦しいことも家族との想い
出が積み重なり、そして、互いの信頼は大き
くなる。だから私は、家族の大きな愛情を感

じる二とができる。

家族の関係がしっかりしていないと、友達との関係も、学校での生活もうまくいかなかった。私は、父や母が私にしてくれたように家族を大事にしていきたい。親が子を思う気持ち、家族がお互いを認め合う気持ち、そして自分の行動に責任を持つことができれば、家族はしっかりとしたものになる。

私もいつかは花歌のように独立し、家庭を持つ日がやってくると思う。家族の形態はど

んどん変わっていくものだが、一緒に暮らしていなくても、家族であることは変わりないし、それぞれがお互いを思う気持ちが大事なのだから。

今、自分は家族と同居し、好きなことやりたいことを自由にさせてもらっている。しかし、いつかは必ず自立しなければいけない。その時は、自分自身の行動に責任を持ち、地に足を着けた生活ができるように、今から少しずつその自覚を持っていきたいと思う。